

一年両分性説覚書

年中行事の構成究明に向けて

田中宣一

一

複雑な様相を呈しているわが国民間年中行事の構成を考えた場合、正月（一月）と盆（七月）の諸行事に多くの類似・対応が認められることは、早くから指摘されている。

さらに二月と八月、六月と十二月の行事にも類似するものの少なくないことから、現在のように一月から十二月までを一単位とするのではなく、かつて、一月から六月まで、七月から十二月までというように、一年を両分し、同じ行事を半年ごとに繰り返すことが、年中行事の基本的原理と

して存在していたのではないかとされている。これは、年中行事の二重構造⁽¹⁾とも、両分性⁽²⁾、二期区分、二分制⁽³⁾などとも呼ばれているもので、民俗学における年中行事研究の通説となっているといつてよいであろう。（本稿では以下、両分性の用語で統一したいと思う。）

多くの単位行事⁽⁴⁾が複雑にからみ合っている民間年中行事は、南北に細長く複雑な地形を有するわが国において、長い年月の間に徐々に形成され、改変されて現在にいたっているものである。それらには、地形や気象条件の規制を受け、生業の円滑な営みの必要上から自然に生まれ存続しているものもあろうし、中国をはじめ諸外国の文化の影響が

浸透して定着したのもあるであろう。これらの諸行事を整理するにあたり、その基準のたて方によって、すでに、祖霊信仰と御霊信仰の対立という観点⁽⁵⁾や、祖先祭祀・農耕儀礼・祓浄の儀礼に分類する方法もとられており、いずれも有力なものといえよう。

私は現在、わが国の民間年中行事を考えるに際して、①ほぼ春耕から秋収までの経過を単位とする継承・循環的要素を有するもの、②一年を両分して存在しているもの、③年間に何度か間歇的に繰り返されるもの、④上層文化の要素の強いもの、の四つに整理できないかと思っている。例えて言えば、①は農耕儀礼(特に水田稲作儀礼)の年中行事化したもの、②は以下本稿で述べようとするもの、③は日待や講行事の年中行事化したもの、④は三月節供・五月節供などにみられるある種の要素や仏教行事の年中行事化したもののある種の要素である。もちろん一つの単位行事が右の一つの性格しか有していないのではなく、二つ以上の側面を持っているものは少なくない。例えば、五月節供には上層文化の影響の著しい要素もあるし、また農耕儀礼的要素をも指摘することができるというようにである。今のところ、右の四つは整理作業の必要上から分けようとした

もので、いずれ作業を進めた上で、改めていつの日か、右の四分類をも含めて年中行事の構成について総合的に考察する意図を持っている。

さて、本稿の目的は、主としてそのうちの②一年を両分して存在しているものの吟味をすることにある。

年中行事の両分性は、冒頭で述べたように、すでに民俗学において通説となつていっているといつてよいであろう。私は何もここで、両分性の考えに異を唱えようとするわけでは決してない。しかし、どのような意味で両分されるといえるのかについて十分に検討することなく、一般的な正月行事と盆行事の類似・対応などの安易な指摘を通して、この考えが民俗学において常識化していると思うので、再検討を加えてみたいと思うのである。そして年間を単位とした年中行事の構成を考える場合に、両分性の考えがいかなる点で有効性を発揮するのか、吟味してみたいと思うのである。

二

最初に、両分性の考えがいつごろ主張されだし、現在ま

でどのように継受されてきたのかを、主たる論考によって通観する必要があるであろう。

両分性の原理のあることを明確に主張した恐らく最初の人、折口信夫氏であろう。折口氏は昭和四年九月『折口信夫全集』三十一巻所収「信州講演目録」による）に行なった長野県東筑摩郡東部教育会における連続講義で、次のように述べている。

六月の末から七月へかけては、年の改まる時である。日本では正月から十二月までを一つづきに一年と考えないで、六月を境に、一年を二期に分けて考えた。江戸時代には、作物が思わしくなかったり、世間の景気が悪かったり、悪疫が流行したりした時には、村中が申し合せで、正月をし直す事があった。其を仮作正月と言うのであるが、これは近世に起ったものではなくして、ずっと古くからあるのである。年に二度の収穫をする地方の人人には、一年に春が二度来るのである。其印象が残っている、日本のある部分の民族の考えが、時の経つにつれて、忘却と合理化とによって、年の悪い場合には、も一度正月を繰り返すと、改まってよい年になるのだと考えるように変って来たのだと思われる。支那でも、正月の

十五日を上元、盆の十五日を中元と言うているが、此は日本の古い考えと、偶然ではあるがよく合っている。とにかく、正月を繰り返す事は、近世になる程、露骨になって来ているが、昔から初秋になると、年を繰り返すと云う考えがあったのである。常識的には、麦の秋と、稲の秋と二つに分けても、訣らない事はない。盆にたままつりをする信仰が、仏教の考えと一致しているが、もと仏教では、盆ばかりでなく、年に六度ほど、たままつりをしたのである。処が、独り盆のみが盛んになったのは、此時に神の来臨する信仰が、古くからあった為で、此時に春になると考えたのである。⁽¹⁾

(注、本文は旧漢字旧仮名づかいであるが、新漢字・新仮名づかいに改めた。以下の引用文において、旧漢字・旧仮名づかいの場合にはすべて同様にした。)

これは講演の筆記であるため、裏づけとなる資料出典の示されていないのが残念であるが、折口氏の述べる重要な点は、次のように要約できるのである。

(1) 六月を境に年が改まると考え、一年を二期に分ける考えがあった。

(2) この両分性原理の存在は、仮作正月の習俗から推定で

きる。仮作正月は、年に二度収穫をする人々、すなわち一年に二度春の訪れを考える人々の思想をベースに形成されたもので、近世に顕著になる習俗とはいえ、起源はずっと古いものである。

(3) (正月と同様)、盆にも神の来臨を仰いで春になるといふ信仰が古くからあり、これも両分性原理の存在を推定させるものである。

(4) 中国でも、正月の十五日と盆の十五日は類似している。

右のうち仮作正月のことは、これより二十年ほど後、平山敏治郎氏によって豊富な資料が提示され、詳しく論ぜられ発展させらるることになる。⁽⁸⁾一方、盆に神の来臨を仰ぎ、この時春になるといふ考え、すなわち盆を、正月と対比させて一年を両分した後半の最初の時とする見方のあったらしいことは、それ以前から民俗学界にあつて気づかれていたことではあつた。

柳田国男氏は、

正月と七月と、元は必ずしも大きな差別無く、半歳に一度ずつの祭典として、神の迎送ということの行われて居たのを、図らざる外国の感化を受けて中央から漸次田

舎まで、一方は清く他方はやゝ忌わしく、一方は楽しく他方は秋の初で心細く悲しい祭に、段々に引分けることになつたのではないか。(園点筆者)

盆と正月と、一年を二季に分けながら、片方は六箇月

半、他は五箇月半で節季の来りも変ではあるまいか。

その癖盆と正月には今でも一對の儀式が色々ある。(園点

筆者)

そして後者の文章に続けて、綱引などを正月に行なう土地と盆にする土地とが入交っていること、正月の年神棚と盆の精霊棚とが飾り方から家の者の仕え方、特定の植物を結びつける点まで一致していること等を指摘して、正月と盆の類似・対応に言及している。折口氏が、盆にも正月と同様に神の来臨する信仰があつてこの時にもう一度春になるとしたのは、柳田氏の右の考えと無縁ではないであろう。その後の他の研究者の両分性の主張が、正月と盆の類似・対応を中心に展開していくのであることを思う時、柳田氏が早くに正月と盆の類似点を挙げて二つの行事が対応することを示唆したことの意味は、大きいものがある。⁽¹¹⁾

柳田国男氏の正月と盆との対応の指摘、さらには両分性の示唆は、その後、例えば昭和十年頃に書いたかと思われ

る「眠流し考」⁽¹²⁾や、昭和十四年発行の『歳時習俗語彙』等の論文や資料解説においてしばしばなされ、正月七日と七月七日、若木迎えと盆花迎え、年玉と盆のイキミタマ（生御魂）、正月の塩鯛と盆の刺鯖、正月用の箸と盆箸、正月様という呼称と盆様という呼称等々というように、多くのものに正月と盆の類似を見出している。そしてこれは、ついには、太平洋戦争末期の昭和二十年四月から五月末にわたって書いたとされる『先祖の話』において結実することになるのである。

しかし、柳田国男氏が年中行事の構成を考えるに際して、両分性の原理を明確に意識していたかどうかには疑問を持たざるをえない。たしかにしばしば「一年を折半して」⁽¹³⁾とか「一年を二季に分け」⁽¹⁴⁾るといふ表現を用いていることや、すでに見たように正月と盆の類似と対応を強く意識していたことも間違いないことであるが、柳田氏の初期の年中行事概論として最もまとまっていると思う「民間暦小考」⁽¹⁵⁾には、両分性の指摘はないのである。

「民間暦小考」は、昭和六年十二月に『北安曇郡郷土誌稿・年中行事篇』の巻頭に掲載されたもので、先に述べた折口氏の連続講義より少し後、その講義筆録の『民俗学』

誌発表に前後して書かれたものである。⁽¹⁵⁾柳田氏は当然折口氏の講義筆録を読んでいたであらうし、よしんば読んでいなくても、柳田氏はそれより前に、正月と盆の類似・対応に気づいていたし両分性のアイデアを持っていたことは、すでに述べた通りである。それにもかかわらず、「民間暦小考」には両分性の考えが開陳されていない。「民間暦小考」は、その後の民俗学研究において定説化したさまざまな問題が論述されているすぐれた年中行事概論で、年中行事の構成にも言及しているものであるが、両分性の考えは発展させられていないばかりか、ほとんど触れられてもいないのである。したがって柳田国男氏には、年中行事を考えるに際して、両分性原理が明確に意識されていたかと思わざるをえないのである。⁽¹⁶⁾

なお、両分性の原理が民俗学界で十分な話題となった後の昭和二十四年にも、柳田国男氏は『年中行事』という概論書を発表して、「民間暦小考」を発展させているが、これにも両分性のことについてほとんど触れることのなかったのは、柳田国男氏の年中行事研究を考える場合の私の疑問の一つである。⁽¹⁸⁾

さて、両分性の考えを大きく発展させたのは、宮本常一氏である。氏は昭和十七年に書いた『民間暦』の中で、次のように述べている。

正月が大切な一年の変わり目として考えられているのに對して、盆の一五日もそういう日ではなかったかと思ふ。盆は今では仏を祭る月になっているけれども、その仏教的と思われる行事の中にも実はそうでないようなものが多い。正月の松迎えと盆の盆花迎え、年神棚と盆棚、正月のオミタマ様と盆の無縁仏、正月一五日のトンドと盆の柱松明或いは阿波地方の盆のトンド小屋の如き、名は違ふけれどもその形式は甚しく相似ているのである。……今日一年として区切っているものも古くは或いは盆および正月の二つの区切りがあつたのではなからうかと思われ¹⁹る。

右の説明は、それまでの柳田・折口兩氏の説をほとんど祖述したものである。しかし氏の説は、単に正月と盆の類似の指摘にとどまることなく、さらに発展させて、六月晦日と十二月晦日の対応、六月一日と十二月一日の行事、三月と八月の諸行事、五月と十月の諸行事等の類似にまで言及したことに特色がある。そして、両分性の原理について

次のように考察した。

かくの如く見て行くと、日本における古い行事は、六月と一二月の晦日を境にして切半し、その各六ヵ月中に行なわれる行事も互に相似していたらしいのである。つまり、支那よりの暦によって春夏秋冬の四季の概念の入り来る以前においては、もともと夏と冬とに大きく分けられていたのではないかと考へる。この考へを裏付けるものは、台湾諸蕃の時の概念であつて、アタイヤル族は一年を夏の二季に分ち、夏を木の葉の繁茂する季節、冬を冷い風の吹き来る北方の季節とよんでいる。そして夏は四月から九月頃まで、冬は一〇月頃から三月頃までである。パイワン族は一年を乾湿の二季に分け、冬を乾燥季、夏を雨季としている。その他南方諸蕃中にも一年を二期としたものは多いようである。かくの如き分け方がただちに日本の古代にもあつたであらうとすることは危険であるが、一応参考になるものがある。ただどうして一年を切半していたものであるかということについては、私には今後の宿題として残されている²⁰。

最後の「宿題」の解答は、それより前の折口氏と右の文中の宮本氏の示唆、および次の早川孝太郎氏らの仮説があ

るだけで、残念ながら現在でも、日本民俗学にとって宿題として残されている。宮本氏が指摘する三月と八月、五月と十月の諸行事の類似については疑問なしとしないが、それはとにかくとして、単に正月と盆のみでなく、六月と十二月など他の月々の類似対応にまで注意を喚起した宮本氏の『民間暦』の意義は小さくないといえよう。

宮本氏の『民間暦』に前後して発表された早川孝太郎氏の『農と祭』⁽²¹⁾にも、正月と盆の対応が説かれているが、早川氏は単にそれを指摘するにとどまらず、盆は麦の収穫祭的要素の強いものであることを強調して、稲を中心とする正月との対応を鮮やかに浮きあがらせようとした。盆について、麦などの畑作物を主にした神供や、麦稈を用いた作り物等々の例示をしたあと、切れ切れのように引用で文意を損うことを心配はするが、早川氏は次のように述べている。

作物の種類に依って、神格乃至靈格を異にする訳で、仮りに盆の精霊が麦を以て象徴されるとすれば、それは稲に象徴された神とは、性格的に自ずから異って居る筈である。⁽²²⁾

正月行事が稲の収穫の後を享け、盆が麦の生産を終り、果物野菜をはじめ、その他の穀作が漸次展開し来る

期に当たった事は、注意に価する点で、要するに(盆は)正月に重いで、最も豊饒を約束された季節だったのである。⁽²³⁾
(括弧内筆者)

これは注目すべき見解で、早川氏が折口氏の「昔から初秋になると、年を繰り返すと言う考えがあったのである。常識的には、麦の秋と、稲の秋と二つに分けても、訣らない事はない。」⁽²⁴⁾に示唆を受けたものかどうかは詳らかでないが、両分性原理成立の背景に稲と麦という両穀物の生産終了時期の相違があるとしたものである。この見解は間もなく和歌森太郎氏によって深められることになるが、和歌森氏の後は十分な発展を遂げないまま現在にいたっているように思われる。

柳田国男氏の『先祖の話』は、太平洋戦争末期に書き進められ、昭和二十一年四月に出版されたものである。『先祖の話』の本旨は常民の先祖観の考察であり、そこから家の問題を追求しようとしたものではあるが、この書のいたる所で柳田国男氏は、正月と盆との類似性を説いている。正月と盆との関係について柳田氏の言いたいことは、

盆の方は、今以て先祖を祭る為ばかりに、存在するも

のということを入人が承知して居るが、他の一方の正月は祝う日なのだから、又はめでたい日なのだからそうであるまいと思う人が多い。或は又一方は死人を取扱う寺の僧が干渉し、こちらは三箇日を過ぎてしまふまで、法師には注連縄の下もくぐらせまいとするのだから、ちがうであろうと考えて居る者は多いようだが、それは単に此頃はそうなつて居るといふだけで、最初からこの通りだったか否かは、もつと詳しく事実を知つた上でないといふ断ずることができない。⁽²⁷⁾

盆と正月と両度の魂祭が、各々一方に偏して発達するようになつてから、我々の先祖たちは之を二つに区別する方に力を入れ、次第に共通の点を見落そうとする傾きを生じた。その中でも著しいのは新年には「みたま」と謂い、盆に限つてシヨウロ又は精霊さんなどということ⁽²⁸⁾で、この為を追々と別ものものようになって来たが、二つは元来が同じものの和語漢語であつた。

ということになるであらう。このために柳田氏は、新年のみたまと盆の生きみたまのほか、盆にも「悲しい事にも出逢わず、二親が揃つて長生きをして居るような家々では目出たい日であつた。現に田舎では、おめでとうと謂つて人

が盆の礼に来て居る⁽²⁹⁾」こと、すなわち、正月の年頭礼に対する盆礼、年神棚と盆棚、松迎えと盆花裁り、暮の煤掃きと七月七日の井戸浚え・道具磨き、正月と盆の十六日の御齋日、小正月の火祭りと盆の火等々、すでに見たような大正末・昭和初期以降事あることに指摘され続けた正月と盆の類似点を各所に散りばめながら、正月と盆が元来は同じ意味を有する行事であつたことを主張したのである。この時点での柳田氏のこの考えは、すでに説明したように年中行事研究史を繕けば、柳田氏自身にとつても日本民俗学にとつても決して目新しいものではなかつた。しかし、民俗学界の最中心人物であつた柳田氏の纏つた一冊の書物の中で繰り返し説かれたことにより、ここにおいて多くの人々に、正月と盆の類似対応が確実に印象づけられることになつたと思われるのである。

『先祖の話』以後においては、正月と盆の類似対応の考へは定着したといえよう。都丸九十一氏の「正月と盆の類似行事」⁽³⁰⁾のように、そのことを強く意識した資料報告がなされたり、昭和二十五年の『民間伝承』に載つた正月や盆についての「問題解説」⁽³¹⁾にも、二つの類似や対応、さらには両分性の原理をふまえた解説がなされるようになる。た

だ、昭和二十六年に完成した柳田国男監修・民俗学研究所編の『民俗学辞典』にほとんど触れられていないところをみると、まだ市民権を得ていなかったとすることもあるいはできるであろうか。⁽³²⁾

戦後、両分性原理の追究に新たな視角を提示して研究を飛躍させたのが、平山敏治郎氏と和歌森太郎氏である。

平山氏は昭和二十四年九月二十四日の第一回日本民俗学会の研究発表会での発表を、「取越正月——文献と伝承について——」⁽³³⁾として要約し、さらに昭和二十七年の「取越

正月の研究——日本民族信仰の伝承学的考察」⁽³⁴⁾に発展させた。これらは、一月以外に臨時に正月の設けをして年の改まりを期待する民俗を問題にしながら、民俗学における文献の利用という方法論にまで言及したもので、有益な論考である。方法論のことはここではひとまずおくとして、時ならず正月を迎えようとする取越正月については、暮のホトケの正月や、厄年の者が小正月や二月朔日などに年重ねをする習俗、同齡者の死に際して耳塞ぎをする呪法等々に見られる、障りのある年を早く更改することによって穢れから離れようとする常民の伝承の心意を説いたあと、流行

正月の考察へと進んでいる。流行正月とは、年の途中に、天候が不順で凶作の恐れが生じたり、疾病が蔓延したり、その他何かの不都合が予想されたりした時、門松を立て、注連縄を張り、餅を掲ぎ、正月札を交わすなど、正月を取越して新年を迎えた心持になって再出発をはかろうとすることである。そしてこれは概して、六月を中心とするかつての夏の終わりから初秋にかけて多く行なわれたことであつたという。平山氏は江戸時代には決して珍しくなかつたこととして数々の資料をあげたうえで、さらにそれは鎌倉時代のものにまで及ぶといい、最後に次のように述べている。

かくて取越正月は鎌倉時代に至って初めて成立した呪法と考えるよりも、更に溯つてその起源を求むべきであり、律令制の古代帝国の制度となつた改元の思想を受容した基盤もここにあつたとしても出来るから、恐らく原初的な村落共同体の文化にも比定すべき祖型の既にあつたと想わざるを得ないのである。即ちわが民族文化の所謂固有の信仰であつたと考えるのである。⁽³⁵⁾

右の平山氏の論考は、年中行事の両分性を直接問題にしたものではないが、年の途中に正月を繰り返す伝承の心意

の存在したことを証明し、年中行事研究に与えた影響は小さくないと思われる。

平山氏の取越正月に関する研究に前後して発表され、相互に刺激を与えあつたと思われるものに、和歌森太郎氏の「六月一日」⁽³⁶⁾がある。「六月一日」は、多岐にわたる六月一日を中心とする六月の伝承を整理分類し、六月は脱皮新生をはかるために「物忌禊祓を要求した齋月」であると考え、六月の伝承に川祭り・水神祭的要素が強いのは、そこから派生したものであらうとしたものである。さらに、かつての宮中で六月と十二月の一日から御贖物が行なわれたこと、また両月一日に忌火御飯を供したこと、両月十一日に月次祭をし、神今食の儀を行なったこと、両月の晦日に大祓を行なったこと等に触れ、六月と十二月が対応するものであると述べ、共に齋月であつたとした。そして六月・七月の民俗には麦に関する行事やそれを神供とすることの少なくないことを述べ、齋月としての六月に、麦の収穫祭的性格のある盆の前の月としての意味を持たせようとし、次のように述べている。

七月の祖霊祭の前提として、前月たる六月が齋忌の要求される月とされたと見ることが可能とならう。それは

あたかも、正月の祖霊祭の前提として、前月たる十二月が齋忌の要求される月であつたのと相応することになる。⁽³⁷⁾

麦の収穫云々のことは、今後さらに検討を要することであるが、六月が田植終了後と麦収穫後という年間の大きな変わり目であるとする⁽³⁸⁾ことと、六月と十二月が対応関係にあり、共に盆と正月を前にしての齋月としての性格を持つ月であらうとする主張には、取るべきものが多いと思ふ。これは先に述べた早川氏の考えや宮本氏の示唆した六月と十二月の対応をさらに前進させるものであり、和歌森氏の『年中行事』⁽³⁸⁾に同じ見解が引継がれることになるのである。

昭和二十四年から二十七年にかけて公表された平山・和歌森両氏の考えは、それまでの正月と盆の二度の魂祭りの存在や、それにまつわる諸要素の類似対応に目を奪われがちであつたところへ、六月から七月にかけて年の改まりを希求し信じる心意の存在したことを強く印象づけ、両分性の研究を大きく進展させたといえるであらう。

さらに平山氏は、昭和三十一年十月の第八回日本民俗学会で発表したものを、「年中行事の二重構造」⁽³⁹⁾としてまとめた。そして、従来の正月と盆の類似に加えて二月と八月

の二日にエトスエ(灸をすえる)を行なう地のあること、社日や彼岸が二月と八月で類似対応すること、三月と九月の十六日に農神祭りする東北の例等を挙げて、両分性を強固なものにしようとした。その後、

この事実から推してわれわれは古代の曆書以来春夏秋冬の四季に分つ歳時のリズムを守ってきたが、このような四季の体系が立てられる以前には一年を二季とした知識もあつたと想定することが可能にならう。実際近隣の諸民族には年二季の区分をもつものもあるし、古く中国においても二季であつたらしいことは、左丘明が春秋を伝する時に書名の由来を説くにこの説明を用いていた。西欧においてもゲルマンの古代社会には牧畜民族の立場から夏冬の二季が先ず立てられたとある。

と述べた。これらは両分性の研究史に照らしてみても、特に斬新な考えとは言えない。しかし続けて、平安時代前期に編まれた『年中行事御障子文』の正月から六月までと七月から十二月までを月日ごとに比較対照させた結果、驚くほどの一致を有する点を指摘されたのは、新しい発見であつた。類似点を列挙したあと、次のように主張したのである。

行事の一々の具体的な事実に関して、内容に立入って

論ずるのが目的ではない。注意を惹きたいのはその構成原理である。一見して直ちに六ヶ月毎に同じ行事が数多く繰返されていたことに気がついたのである。このような構造が見出されたのは新しい発見でもなければ不思議な現象でもなかった。平安朝の貴族たちの年中行事も現在まで伝承した民間の歳時習俗も同じ文化領域のうちにある一民族の共通の原理に基づくものであつたからである。歴代の貴族社会も農民社会も日本の文化の共有財を持ち分つた仲間であつたからである。もとより生活条件を異にすることによって、両者の歴史的な文化に特色が現われ、行事にも変化を生じたのは当然であるが、その基礎的な構造は共通のものであつた。

この見解について検討する余地はまだ残されているであろうが、現在の民間の年中行事においてのみならず、平安時代前期の宮廷社会の年中行事においても六ヶ月ごとに繰返される行事の多いことがわかつたことは、わが国年中行事の構成原理に両分性のあることを強く印象づけることになつたのである。

このような両分性原理指摘の高まりの中で編まれたのが、『日本民俗学大系』7である。これは大部分を年中行

事の論文にあてたものであるが、この中で両分性の考えを積極的に発展させたのは、郷田(坪井)洋文氏の「年中行事の地域性と社会性」⁽⁴⁾である。長文にわたる右論考の流れをここでたどる余裕はないので割愛するが、最後は両分性の問題に収斂していくように思われる。その最後の部分で氏は、年間の類似対応する行事群として次のようなものを挙げている。

I 1 春亥の子・春社日・初午・春彼岸Ⅱ(八十八夜)Ⅰ(八月十五夜)Ⅱ亥の子・十日夜

2 春亥の子・春社日・初午・春彼岸Ⅰ秋社日・秋彼岸

Ⅱ亥の子・十日夜

3 地神降りⅠ地神昇り

4 コト八日(二月)Ⅰコト八日(十二月)

Ⅱ 小正月Ⅰ盆

2 冬至Ⅰ夏至

3 初朔日Ⅰ八朔

4 大正月Ⅰ釜蓋朔日

5 川浸りの正月Ⅰ氷の朔日⁽⁴⁾

このうち、Iは農耕儀礼を中心とした諸行事で、呼称と期日は異なっているが本来は同じ性格の行事だという。春

と秋、または春と冬の期間が1・2・3・4のそれぞれで異なっているのは、その地域における農耕段階の遅速に原因があるのであり、本来は地域ごとの田の神の去と来の時期に行なわれる同じ性格の行事だというのである。Ⅱはそれまで両分性の行事として指摘されてきたものであるが、氏はIの諸行事も基本的には同じものと考えるのである。そして、「この一年二分制(すなわちⅡ)と、田の神去来の時期による二分制(すなわちⅠ)とは本来基盤を同じくするもの」(括弧内は筆者挿入)であるが、後者の場合には、「その農耕の段階の地域差によって、(完全な)二分制とはなりえなかった」(括弧内は筆者挿入)という。氏の議論は多岐にわたって簡潔にまとめにくい点があり、氏の本意をはずれていないか心配するものであるが、私には上記のように読みとれるのである。

ここにおいて、従来指摘されてきた六ヶ月ごとに繰り返す諸行事のみならず、右のIの農耕儀礼中心の行事にも両分性原理を看取しようとする新しい見解が示されたのである。いよいよ両分性原理が年中行事の構成を考える場合の動かしがたい大きなものという印象を与えるようになったのである。

さらに氏は、この原理成立の背景を生業の相違に求めようとしている。すなわち、ある集団が同時に持つ田と山の生業形態の季節による相違と転換が両分性を成立させたとするのである。稲作に適する時期が夏を中心に展開し、山仕事に適する季節が冬を中心に展開することと密接な関係を有するとし、この両分性の考えは年中行事のみならず、日本人の他の生活原理把握にも示唆を与えうるものとする。最後に氏は、

日本では集団の生産的活動が半農半漁・半農半山というように、その比重の差はあっても、まったく専門的形態をとることのない村落や集団では、行事の種々の面で二分的傾向をとる。ことに予祝的な占い競技に二分的傾向が強く残っているのは、生産の場の転換と神信仰とが背景になって村落構造を規制してくるのではないかと思う。神前における予祝的卜占・競技などが、しばしば海方と山方・また田と畑という二分方法をとるのも、生産と関係なしには把握することができぬように思う。そして日本の場合には、海と田・畑、畑と山というように、生業転換が幾つかに分れるが、その豊凶を予知し祝う時に、正月や盆、五月・八月・一二月などと、遠来の神を

迎えるのであった。⁽⁴⁸⁾

と述べている。この田と山の生業形態の相違と転換が各種の行事やひいては生活原理において持つ意味については、その後、小野重朗氏が問題にするところであり、坪井氏自身⁽⁴⁹⁾の以後の研究視点の中に据えられ発展させられていくものであるが、年中行事構成上の両分性の問題とは直接に関係しないかと思うので、割愛したいと思う。

坪井氏の右の論考以後のもので、両分性原理について考える場合有益なのは、小島櫻礼氏の「盆と正月の対位と暦法」⁽⁵⁰⁾と宮田登氏の「暮らしのリズムと信仰」⁽⁵¹⁾である。この二論文について簡単に触れておこう。

小島氏は、民間の正月行事には農耕儀礼との複合も見られるが、盆と対になって先祖祭りとしての意味を強く持っていたとして、従来の諸家の説を認め、その背景には死霊信仰があるという。そして、正月と盆の類似対応がこれほどまでに顕著であるのは、中国からの輸入暦の影響によるものであろうというのである。ここには両分性原理がわが国固有のものとするよりも、暦の影響を強く見ようとする考え方がある。

宮田氏は、一年を両分して存在するもののうち、特に六

月一日と十二月一日について吟味し、すでに述べた和歌森氏の考えを民間伝承を主資料にしてさらに発展させようとした。その結果、六月一日に再生を希求する人々の心意がうかがえるとし、さらに次のように述べている。

六月一日との対照からいえば、十二月が後に正月をひかえているだけにこの時期が明確な年の改まりとはいいがたいが、川辺で厄除けをして身体をきよめ、神祭りを行なったことは、名称のいかんを問わず、全国的に共通するといえる。六月に対して十二月の存在はちょうど七月の盆月に対して、正月という形の両分性に当てはまることがいえるだろう。⁽⁸⁸⁾

三

以上長くなったが、両分性説の萌芽から発展、定着にいたるまでを概観してきた。それらを纏めれば、現在、両分性原理は次の三点を主要な根拠にして、通説としての地位を保っているように思われる。

まず第一に、正月と盆の諸行事が類似しており、一年を両分してそれぞれ対応するものであること。さらに、単に

類似しているだけではなく、基本となる先祖の魂祭りという点において正月と盆は共通し、元来同じ行事の半年ごとの繰り返しと認められること。

第二には、他の月、例えば二月と八月、六月と十二月などの諸行事にも類似対応すると考えられるものが少なく、半年ごとの繰り返しは正月と盆のみでなく、かつては他のすべての月にも及んでいたことが予想されること。民間のものでも現在のものでもないといえ、『年中行事御障子文』における対応は、その有力な裏づけとされた。

第三には、六月前後という夏から秋にかけての頃に、年の改まりを認める雰囲気が存在したこと。これは、六月に脱皮新生の意味を認める民間伝承とも関連することである。

では、両分性原理がなぜ成立したのかということが次の問題になる。これについての十分な解答はまだ用意されていないが、いくつかの示唆に富んだ推測はなされている。

第一は生業の相違によるとするもので、稲作の播種・収穫と麦作のそれとは大よそ半年近くのずれがあるので、それぞれの収穫後の祝いが正月と盆成立の背景となっているのではないかとするもの。あるいは稲作のみでも、一年に

二度収穫する所の考えが何らかの影響を及ぼしているのではないか、とするものである。

第二は、東南アジア諸地方においては一年が雨期と乾燥期に分かれる所が多く、このような所における一年を夏・冬の二期に分ける季節観がわが国の古い時代のそれに少なからぬ影響を与えているのではないか、とするもの。

第三は、何らかの輸入曆採用後に整備されたものではないか、とするものである。

ところで、両分性説はどのように評価されているのであろうか。一般的に言えば、その存在を否定する言はなく、すでに通説もしくは定説として定着しているといえるであらう。認めるとしても中に慎重な意見がないではないが、より積極的に評価して、わが国固有か固有に近い原理であるとするものや、日本人の季節観や曆日観（これはとりもなおさず年中行事観であろう）を通して表現されるものと基本的な生活原理そのものも二元的に把握すべきだとする意見も出されているのである。

私の理解する年中行事両分性学説の現状は、以上の通りである。

四

最初に本稿の目的は、一年を両分して存在している年中行事の吟味することにあるといったが、いよいよその問題に移ろう。吟味するといっても、両分性原理の存在を否定するのでは決してない。肯定する立場に立つのである。肯定しながらも、何が両分的なのか、また両分的に見えるがらもどの部分は違うのかを吟味したいと思うのである。それを、正月と盆を例にしながら考えてみたい。

すでに見たように、一年を両分して存在するもののうち、最大規模のものは正月と盆であるとされてきた。このことは間違いないことであらう。しかし逆に、正月と盆が一年を両分する全く類似対応する存在かとなると、疑問なしとしない。そこを短絡させて考えると、年中行事の構成を誤って理解することになるであらう。

柳田国男氏の『先祖の話』が、民俗学に与えたインパクトは大きかった。それまで常識的に仏教行事であると考えられていた盆と、神祭りとされていた正月が、元来はともに先祖の祭りとして共通の意味を有すると説くこの書の趣

旨が衝撃的であったがゆえに、正月と盆は基本的には同じという理解を人々に植えつけたように思われる。事実柳田氏はそのような説き方をしているし、数年後に発表した「年神考」⁽⁵⁷⁾においては、年神Ⅱ田の神Ⅱ家の神（先祖の神）という議論を展開し、次のように述べている。

上代素朴の世には、この三通りの神々を、一つに考え且つ信ずることが出来たのではないかということ、これが田社考を企てて居る私の動機であり、又「先祖の話」以来の仮定の目標でもあった。⁽⁵⁸⁾

各地の伝承を分析すると、正月に訪れ迎える年神には確かに田の神・農神的性格が強いし、また家の神・祖靈的要素も濃い。柳田氏はこれを一つの神として括って盆の祖靈と対応させようと試みたのであり、その時の氏の念頭には正月Ⅱ盆という強烈な理解があったものと思う。そのため、盆と類似対応しない多くの正月行事を閑却するか、さもなくばそれをしも無理に対応させようとしたように、私には思われるのである。

さて、従来、類似し対応すると指摘されてきた各地の正月と盆の諸要素を整理すると、次のようになるであろう。

A (ア)元旦↓釜蓋朔日 (イ)七日正月↓七夕 (ウ)小正月↓盂蘭

盆 (ニ)御斎日(一月十六日)↓御斎日(七月十六日) (オ)二十日正月↓裏盆 (カ)二月初朔日↓八朔

B (ク)暮の煤払い↓七月七日の井戸浚え・道具磨き (キ)松迎え↓盆花迎え (ク)若木迎え↓盆花迎え (ケ)年神棚↓盆棚

(カ)臨時の棚(年神棚・盆棚)の一隅(ミタマサマ)への供え物として別に三角に結んだ十二の飯を供えること (カ)正月礼↓盆礼 (キ)正月の塩鯛↓盆の刺鯖 (ク)正月用の箸↓

盆箸 (ク)小正月の訪問者↓盆の来訪者 (ケ)小正月の火祭り↓盆の火 (ク)小正月の踊り・綱引↓盆の踊り・綱引

C (ア)「正月様」の呼称↓「盆様」の呼称 (イ)祖靈としての年神↓祖靈としての精霊 (ウ)年玉↓イキミタマ (エ)暮に祀るオミタマ↓盆の無縁仏

Aは期日が対応するもの、Bは行事やそれに用いる施設・道具が対応するもの、Cは意識されている神格などが対応するもの、といえるであろう。

周知のように、正月は一日を中心とする大正月と、十五日を中心とする小正月に大別できる。右のAは明らかに小正月と盆とが対応するものである。ということは、満月に営まれる小正月と盆は、その前後に配置されている日々とともに、期日的に見事に対応しているということができ

る。しかしこれは期日上のことであって、その日々に営まれる行事内容が類似対応しているとは考え難い。元旦の有する意味と諸行事は、釜蓋朔日のそれとは類似していない。元旦は独立した年頭の神祭りの日であり、小正月の前段行事ではないが、釜蓋朔日にはほとんど盆開始の日としての意味しかない。全国的に七草行事がある七日正月には、七夕のように星祭りや水辺の祭りの性格はないし、七夕が盆を迎えるための物忌開始の日と理解されるのに対して、七日正月には小正月に対して同様の意味はまず認められない。小正月の神祭りやそれに付随する火祭りや来訪者は盆に類似するものを十分に見出し得るが、それは十三日夜から十五日までの総体としての小正月行事と盆行事であって、小正月の十五日と仏教行事としての十五日の盂蘭盆会はほとんど類似していない。わずかに類似対応するのは、地獄の釜の蓋が開くという寺家の解説がつく十六日の御齋日だけであって、二十日盆と裏盆、二月初朔日と八朔もともにほとんど期日の対応のみにとどまるといえよう。このように、正月と盆が対応するといっても、暦日上の期日の対応のみのもの少なくないことを指摘しておきたい。

Bは、行事内容の上で類似対応すると考えられてきたものである。確かにそのことは認めてもよいであろう。しかしそれらの行なわれる期日をみると、大正月↓盆、小正月↓盆というように分かれることに気づく。柳田国男氏が説いて以来、民俗学では、満月の夜を中心とする小正月が正月として本来のものであったが、官曆の普及とともに次第に年頭行事が月初めに吸収されて大正月が成立したとする説を、一応承認してきたといえる。⁽⁶⁾この意味では、大正月↑盆、小正月↓盆というように行事内容上対応が分かれるのは、過渡的現象というように解釈できよう。そして盆との比較でみるならば、来訪者や火祭りなどを除いた多くのものは、大正月↓盆の対応と認めることができる。小正月の場合には、小正月行事を最も特色づける農耕子祝行事や年占に、ほとんど盆との類似対応を見出すことができないのである。

Cの意識されている神格については、どうであろうか。これはA・Bの検討の結果と関連させ、むしろ研究者側で判断すべきことでもあろうが、民間解説による限り、正月も盆とともに、先祖の魂祭りと意識していたらしく思われる。その点、正月と盆は類似対応するとの理解があったと

思われるのである。

このように、正月と盆について言われてきた今までの両分的性格にも、少し整理してみると、期日上対応するものと行事内容の上で対応するもののあることがわかった。

そして、前者は明らかに小正月と盆との対応であり、後者は主として大正月と盆とのそれであった。正月と盆に両分的性格のあることを説く場合、右の吟味の結果を踏まえてなされるべきであろう。何となく一緒にして類似対応を云云するのは、安易すぎるように思う。

ところで、なぜ期日上と内容上とに分かれることになったのであろうか。これははなはだ難しい問題で、早急な結論を出すことは控えたいと思う。一年の途中における年改まりの思想の検討、二度の魂祭りの意味の吟味、暦の分析と普及の仕方の研究等々をさらに進めた上で、再び考えたいと思っている。

両分的性格を持つものの代表とみられていた正月と盆において、右のような問題点が存在するのである。他の月、例えば従来よく指摘されてきた二月と八月、六月と十二月においても、期日的な対応を無理に内容上の対応にまで及ぼすことはなかったか、またその逆のことはなかった

か、再吟味する必要がありはしないだろうか。

五

年中行事の構成を考える場合、両分性にばかり目を奪われていると、正月行事の中で盆と類似対応しないものを忘れてちになる。正月行事の中には、正月に行なわれる単位行事だけを取り上げたのでは、本来の意味の理解できないものが少なくないのである。また、盆の魂祭りとの比較をからめてみてもわからないものがある。仕事始め、特に鍬入れとか初山入り、および農耕予祝儀礼の年中行事化したものがそれである。それらは秋から正月、正月から春へとつづく一連の行事群の中に位置づけることなくしては、十分な理解に達しないものである。例を挙げよう。

神奈川県葉山町長柄の例⁽⁶²⁾——この農家では一月四日早朝に門松をはずし、年神のオソナエ(供え餅)を下ろす。そして、オソナエの一部と散供(米)、小さな注連飾りを持って山へ行き、「今日から山を始めさせていただきます」といって持参したものを供え、帰りにオンパンという木(よく山の境に生えている)を少し伐ってくる。これを山始

めまたは山祭りという。同時に畑へも行き、一畝うなつてオソナエの一部と門松の芯を供えてくる。これを、うないぞめという。

一方、十一日には屋内の正月飾りをすべてはずしたり、蔵開きといって、初めて土蔵や物置を開けてオソナエを入れた雑煮や汁粉をそこに供える。田へ出て、田のうないぞめもする。また、四日の山始めの時に伐つてきたオンバンという木を三十センチぐらいの長さに切つて、二本ずつ藁で縛り、正月飾りはずすと同時に年神にあげる。これを、アーボ・ヒエボという。

アーボ・ヒエボは十四日に下げ、そのあとに木にならした団子(木の枝に沢山つけた団子)を供える。

十四日に年神から下ろしたアーボ・ヒエボは、春の四月下旬の種播きの時に躑躅や山吹などの花と一緒に田の水口に立て、そこに焼米を供えて水口祭りをする。

右の山始め・畑のうないぞめ・田のうないぞめ・蔵開き等々の仕事始めの行事が、盆に対応するものを見出せない正月独自のものであることは、年頭行事の性格上当然のこととて、取りたてて論ずべきことでもない。問題にすべきは、四日の山始めに伐つてきたオンバンという木を、十一

日には二本縛つてアーボ・ヒエボ(これは恐らく古くは作物の豊饒を願う粟穂・稗穂という作り物であつたろう)として年神に供え、さらに十四日に下ろしたあとと保存しておいて、春の種播きの時に田の水口に立てるといふことである。この木は何らかの神霊の依り代としての意味を持つものであるが、これが山↓家↓田と移動する、その一過程に正月行事が位置づけられるのである。四日の山始めや、十一日から十四日までのアーボ・ヒエボがそれぞれ独立して存在するのではなく、相互に関連を持ちつつ行なわれ、共に春の水口祭りへと連続している点に注意を払うべきである。このような性格の行事は、盆にはまず見出しえないのである。

岡山県備中町旧湯野村の例⁽⁶³⁾——今は行なわれなくなったものも多いが、一月二日には山入り始め・田の打ちぞめ・搗きぞめ等の仕事始めが行なわれる。山入り始めは、恵方の山へ行って樺か槇の木を一本伐り、小枝のついたまま持ち帰り、六月の田植の時までとっておく。家によっては、伐つてきたあと正月の間は門口に立てておいて焼米や蜜柑などを供え、そのあと田植まで保存するともいふ。

田の打ちぞめは、戸主が一升の米を持って畑に行き、恵方に向けて畑に茅の穂をさしてその米を供え、一鉢打てば千鉢、二鉢打てば万鉢」と唱えながら、三鉢打つ。そして、供えた一升の米は持ち帰り、搗きぞめに搗いて年神に供える。

搗きぞめは、米を臼で精白することで、打ちぞめの時に田に供えた米を精白したあと、一升舂に入れて年神に供える。そのあとすぐに下ろして一部分を昼飯に炊いて食べ、残りの米は、田植の時まで他の米と絶対に混ぜないようにして保存しておく。

そして五月（旧曆）の田植の時には、搗きぞめの時に搗いた米を、山入り始めの時に伐ってきた木の薪で炊いて食べるのである。

山入り始めは、単に初めて山に入って仕事をするとということだけではなく、田植に用いる木を伐れることも意味する。もしくは、田植に用いる前に、何らかの神霊の依り代と考えて正月に立てる木を伐つてくることを意味しているのである。搗きぞめは、田の打ちぞめの時に田に供えた米を家人が共食するために搗くことであり、それはまた、田植の時に特別に炊く米を調製することでもあった。

右の神奈川県と岡山県の例は、全国的にみて決して特異なものではない。部分的な相違はあろうが、かつてはほとんど全国に存在した正月行事であるといってもよいであろう。これらの特徴は、正月に行なうことだけで完結するのではなく、内容的に春・夏の農耕儀礼と連続する営みである点にある。このように正月行事の中には、他の季節の行事との密接な関連を追うことなしには十分な理解に達することのできないものが少なくなく、この種の正月行事は、盆行事の中に類似対応を見出すことのできないものである。正月↓春・夏だけではなく、さらに秋↓正月↓春・夏と連続する例を見よう。

鹿児島県根占町川南・牛牧の例——ここでは秋の刈り始めの時に、カリホ（刈り穂）といって稲を三株ほど小さな束にして持ち帰り、台所のニワにあるウガマサー（大籠）に供えて押んだあとで、台所の柱とか軒下などに括りつけ、乾かして保存する。

年末になるとそのカリホを下ろし、籾をこぎ落として脱穀する。

正月十五日朝には、年末に脱穀したカリホの米を加えて粥を炊く。また、脱粒したあとのカリホの藁の先にそ

の粥の汁をつけ、そこにカリホの粃を脱穀・精白した時に出た粃殻と糠をつける。こうすると稲の穂の垂れたような形のものになるが、これと粥を食べた柳の長い箸と一緒にとっておく。

正月十八日にはカンゴツクリと云って、十五日に用意した粃殻のついでにカリホの糞を用いて、カンゴ（鳥のことだという）を作る。藁の根の方をくびつて頭と嘴にし、糠・粃殻のついた葉先が尾になり、足として柳箸をさし、背には譲り葉・モロムキ（イヌガヤの枝）をさしたものである。このカンゴを台所の火の神棚の上あたりに掛けて保存する。

春、苗代に粃種を播く日にこのカンゴを水口に置き、カンゴの背に黍団子を二つ重ねてのせ、「水神様と田の神様に上げ申す」と唱えて拜む。これを田の神祭りという。カンゴはそのまま水口に置いたままにする。

これは事例の報告者小野重朗氏も説かれるように、稲魂の継承を暗示する行事群で、秋の穂掛け儀礼↓年末のカリホの脱穀↓正月十五日朝の粥および稲穂の模造品作製↓正月十八日のカンゴツクリ↓播種時の水口祝いというように、一つ一つが前の行事を継承しつつ連続して行なわれる

ものである。このうち、正月十五日朝の粥をつけた稲穂の模造品を作ることや十八日のカンゴ作りは、それだけ見たのでは単なる農作の予祝行事としか理解されない。しかし特別に刈り取った初穂を鄭重に保存しておいて作ることや、作ったものを水口祭りの神の依り代のごとく扱っていることを考えると、現在では農耕の予祝行事のごとく見えるとしても、単にそれだけではないもっと総合的な連鎖儀礼の中に位置させるべきものである。

小野重朗氏は南九州の資料を用いて同系統の行事を比較され、その退化・断片化の傾向を次のように指摘している。

- ①（稲魂の継承を暗示する）総合的な連鎖儀礼が断片的なきれぎれの行事に分化する。
- ②原初的精神が忘れられて予祝化や遊戯化が強くなる。
- ③特に稲魂儀礼が喪失する。
- ④正月農耕儀礼が分化してきて盛んになる。
- ⑤農作業に伴う予祝行事が正月行事に吸収され集中する。
- ⑥農地での儀礼が家での儀礼になる。
- ⑦農耕儀礼が生活一般儀礼に変わっていく。（括弧中と番号は筆者）

以上であるが、これらの指摘は、一連の農耕儀礼が暦日に固定し、遂には連鎖の環を解いて一見すると無関係な複

数のバラバラの単位行事に分化することを述べたもので、注目すべき見解である。そして、正月行事には実はこのようにして成立したものが少なくないのである。

六

一年を単位としてみた場合の年中行事の構成は複雑である。一見すると、雑然と各月日に配置されているかに思われる。しかし、行事の性格や相互の関連を具さに検討してみると、その配置のされ方に一つの原則のようなものを見出すことができる。

諸先学が、一年を両分して半年ごとに繰り返す諸行事のあることを発見されたのは、大きな成果であった。しかし、そのようになった理由の究明は今後検討すべき問題として残されている。その検討をする際には、両分して存在すると従来考えられてきたことを、自明のものとしてその先へ進むのではなく、本稿で吟味したように、どの点の両分的でどの点が両分的に見えながらも異なるのかを見極め、両分性原理を確実にした上でなされなければならぬ。

また、両分して存在するものの典型とみられてきた正月と盆も、よく見ると、正月行事の中には盆に類似対応しないものが少なからず行なわれていることもわかった。それは、農耕儀礼の年中行事化したものである。研究史でみたように、正月と盆が両分的に存在するという意識が先に立って、正月が稲の祭りの要素を有するがゆえに盆まで麦の収穫祭だと解釈し、ともに収穫祭の性格を有する類似対応する行事だと無理に結びつけて考えようとする傾向がなかったであろうか。さらに、春と秋の亥の子、二月と十二月の事八日というように、ほぼ春と秋とで対応する諸行事をも両分性の尺度で計る見方があったが、これも両分性原理を意識しすぎたものといえよう。

農耕儀礼の正月行事化したものは、正月行事の枠内だけで処理しようとするのではなく、元来は前の儀礼を継承して行ないつつ後の儀礼につながっているものだという、連鎖の環の中で理解すべきものである。その連鎖は一年を一つの環としているゆえ、私はこの一連の諸行事を継承・循環的要素を持つ行事、もしくは継承・循環的行事群と名づけようと思う。春亥の子と秋亥の子のように春・秋で対応するものは、春と秋の対応が鮮明であるがゆえに一對のも

のであるかのように見えるが、よく分析すれば、これらもほとんど継承・循環的行事群に含まれるものだと理解している。

このように正月行事には、盆と鮮やかに対応するものがある一方、盆とは対応しないで継承・循環的要素を有するものがあるのである。総じて言えば、前者は先祖の魂祭りの性格の行事で、後者は農耕儀礼の年中行事化したものである。民間の正月行事の成立についてはなお不明な部分が少ないが、私は現在、右の二つの傾向は、異なる原理に基づいたものだと思っている。

そして本稿の最初で述べたように、現在、複雑な民間年中行事を、大きく①継承・循環的要素を有するもの、②一年を兩分して存在しているもの、③年間に何度か間歇的に繰り返されるもの、④上層文化の要素の強いものに、整理類別できないかと思っっているのである。

註

- (1) 平山敏治郎「年中行事の二重構造」『日本民俗学』四—二 昭32・1
- (2) 和田正洲「暦と年中行事」『日本民俗学大系』7所収

平凡社) 昭34・3 宮田登「暮らしのリズムと信仰」『日本民俗学講座』3所収 朝倉書店) 昭51・9

(3) 二期区分・二分制ともに、郷田(坪井)洋文「年中行事の地域性と社会性」(『日本民俗学大系』7所収 平凡社) 昭34・3 なお坪井氏は二元性の語も用いているが、二期区分・二分制とは概念がやや異なっているようである。

(4) 宮家準氏の『増補・日本宗教の構造』(慶応通信 昭55・11)では、「単位儀礼」の語が用いられている。

(5) 大島建彦「信仰と年中行事」(『日本民俗学大系』7所収 平凡社) 昭34・3

(6) 宮家準『増補・日本宗教の構造』慶応通信 昭55・11 九九ページ

(7) 折口信夫「年中行事——民間行事伝承の研究」(『折口信夫全集』15所収) 昭31・1 なお引用部分は、『民俗学』二一〇、昭5・10に掲載されたものである。

(8) 平山敏治郎「取越正月——文献と伝承について——」『民間伝承』一三一—一 昭24・11 および、同「取越正月——日本民族信仰の伝承的考察」『人文研究』三一一〇 昭27・10

なお、折口氏説を継承する北野博美氏の『年中行事』(昭8〜10に十二冊刊行、昭48に臨川書店から復刻刊行)に

も、また、夏・秋の境の流行病のことに触れた柳田国男氏の文章(『定本柳田国男集』9、三五七・三五八ページ)にも仮作正月のことは触れていない。

(9) 柳田国男「年棚を中心として」(『定本柳田国男集』13 筑摩書房) 昭38・1(この初出は『民族』一・二、大15・1である) 二四七ページ 以下、『定本柳田国男集』は『定本』と略し、発行所名を省略した。

(10) 柳田国男「春と暦」(『定本』13 昭38・1)(この初出は『週刊朝日』一三一、昭3・1) 一九三ページ

(11) 柳田国男氏がいつ頃正月と盆の対応を強く意識するようになったのか、私は大正中期以降ではないかと思っているが、ご教示いただけたらと思う。なお、同氏が大正三年に発表した「毛坊主考」の中の「ネブタ流し」(『郷土研究』二一五)にはその意識がみられないが、昭和九、十年頃のものと思われる「眠流し考」(『定本』13所収)では、明らかに対応させようとしている(『定本』13 八八・九一ページ)。

(12) 註(11)に記した通り。

(13) 『定本』13 九一ページ

(14) 『定本』13 一九三ページ

(15) 「民間暦小考」はのちに『新たなる太陽』(修道社 昭

31・1)に収められ、同書は『定本』13に入っている。

(16) 「民間暦小考」で柳田国男氏は、一年を兩分するよりも四分する考えを強く出そうとしているかに思われる。

(17) 柳田国男「年中行事」(『年中行事覚書』修道社 昭30・10 初発表は昭和二十四年三月) (『定本』13 昭38・1 所収)

(18) 『民間伝承論』や『郷土生活の研究法』でも、十分な説き方はされていない。

(19) 『宮本常一著作集』9 (『民間暦』 未来社 昭45・1 九七ページ)

(20) 同右 一〇一・一〇二ページ

(21) 早川孝太郎『農と祭』 ぐるりあ・そさえて 昭17・6

(22) 同右 一四二ページ

(23) 同右 一五一ページ

(24) 註(7) 六五ページ

(25) 和歌森太郎「六月一日」(『民俗学研究』2 日本民俗学会) 昭26・7など

(26) 柳田国男『先祖の話』筑摩書房 昭21・4 (『定本』10 昭37・7)

(27) 『定本』10 二七ページ

(28) 同右 六七ページ

- (29) 同右 二七・二八ページ
- (30) 都丸十九一「正月と盆との類似行事」『民間伝承』一三
 一 昭24・1
- (31) 千葉徳爾「大正月をめぐる諸問題」『民間伝承』一四一
 一 昭25・1 萩原龍夫「盆行事の根本問題」『民間伝承』
 一四一七 昭25・7
- (32) 関連項目の筆者については、最近井之口氏の明らかにした
 ものがある(『民間伝承』三二一 六人社 昭56・12
 一二ページ)。それによると、「年中行事」は和歌森太郎
 氏、「正月行事」は堀一郎氏、「盆行事」は編集委員が執筆
 していることがわかる。
- (33) 平山敏治郎「取越正月——文献と伝承について」『民間
 伝承』一三一— 昭24・11
- (34) 平山敏治郎「取越正月の研究——日本民族信仰の伝承学
 的考察」『人文研究』三一—〇 昭27・10
- (35) 同右 三七ページ
- (36) 註(25)に同じ
- (37) 同右 一七六ページ
- (38) 和歌森太郎『年中行事』至文堂 昭34・6
- (39) 註(1)に同じ
- (40) 同右 九二ページ
- (41) 同右 九四・九五ページ
- (42) 平山敏治郎氏には竹田聰洲氏との共同執筆になる年中行
 事のよくまとまった概論「年中行事」(『郷土研究講座』5
 角川書店 昭33・5)があり、この中にも両分性について
 述べられている。ただし、「二重構成」という語が用いら
 れている。
- (43) しかしどういいうわけか同じ頃発表された民俗学の研究史
 ともいべき関敬吾氏の「日本民俗学の歴史」(『日本民俗
 学大系』2 平凡社 昭33・12)には、これについて全く
 意が払われていない。
- (44) 郷田洋文「年中行事の地域性と社会性」(『日本民俗学大
 系』7 平凡社 昭34・3
- (45) 同右 二二七・二二八ページ
- (46) 同右 二三一ページ
- (47) 同右 二三〇ページ
- (48) 同右 二三四ページ
- (49) 小野重朗氏『農耕儀礼の研究』弘文堂 昭45・10
- (50) 『イモと日本人』(未来社 昭54・12)・『稲作を選んだ日
 本人』(未来社 昭57・11)等の中で発展させられている。
 特に、後者所収の「山と里の民俗学」によくあらわされてい
 る。

- (51) 小島櫻礼「盆と正月の対位と暦法」『民俗』46 昭36・8
- (52) 宮田登「暮らしのリズムと信仰」『日本民俗学講座』5 朝倉書店) 昭51・9
- (53) 同右 一五七ページ
- (54) 例えば、『日本民俗事典』(大塚民俗学会編・弘文堂刊 昭47・2)の「年中行事」の項目(執筆者萩原龍夫氏)には「……祖霊を迎える祭りという点で正月と盆とに共通点があり、一年が折半された観があるのは、まだじゅうぶんに解明されない問題である……。」と述べられている。
- (55) 本稿引用の註(40)・(41)の内容はそれであろう。
- (56) 註(44)の二二八ページ、二三四ページに述べるところは、それであろう。
- (57) 柳田国男「年神考」『民間伝承』一四―二 昭25・1 (『定本』13所収)
- (58) 井之口章次「魂まつり」(『日本民俗研究大系』3 国学院大学刊 昭58・5)はこの論調を強引そのものだと評している。(二二〇ページ)
- (59) 『定本』13 一八六ページ。ただし「田社考」(『定本』11所収)では、これが十分に発展されていない。
- (60) 註(15)の「民間暦小考」や、註(17)の「年中行事」など。
- (61) ただし、小野重朗「正月の構造」『日本民俗学』78 昭46・12 はこれに大きな疑問を呈している。
- (62) 拙稿「年中行事」(『三浦半島の民俗・Ⅱ』 神奈川県立博物館 昭47・3)
- (63) 『三十六年度・民俗探訪』 国学院大学民俗学研究会 昭38・10
- (64) 小野重朗「冬を越す稲魂——小正月モノツクリの原型」『日本民俗学会報』54 昭42・11 (のち、『農耕儀礼の研究』 弘文堂 昭45・10に収録)
- (65) 同右 二二一ページ